

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：37409

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K17429

研究課題名（和文）e-learningによる若手看護教員の倫理的感受性向上への取り組み

研究課題名（英文）Efforts to improve the ethical sensitivity of young nursing teachers through E-learning

研究代表者

吉野 拓未（YOSHINO, TAKUMI）

熊本保健科学大学・保健科学部・講師

研究者番号：50711917

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：看護教員の倫理的感受性向上のためのe-learning作成に先立ち、ランダム抽出した看護教員に対し、倫理的ジレンマを感じる場면을質問紙調査を実施した。看護教員は【学生の利益と他の学生の利益を両立できない】【学生の利益と患者の利益が反している】場面など多くの場面で倫理的ジレンマを感じていた。抽出された場面に関して、倫理的な解決方法を模索するe-learningを作成した。若手看護教員を中心にe-learningを公開、運用し、倫理的感受性向上の一助となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

看護教員は臨床実習において、看護師・教員という側面から、倫理的な問題を気づかない場合も多い。本研究においては、臨地実習に潜む倫理的問題についてを明らかにしたことで、看護教員が見逃しやすい場面や問題と感じていながらも対処方法がわからない場면을詳細に抽出することができた。また、抽出された倫理的問題に関する場面及びその問題に対する考え方や対処方法についてのe-learningを作成・運用することで、看護教員の倫理的場面の感受性をあげ、教育能力の向上へ貢献することができた。

研究成果の概要（英文）：Prior to the creation of an e-learning to improve the ethical sensitivity of nursing faculty, a questionnaire survey was conducted on randomly selected nursing faculty members regarding situations in which they felt ethical dilemmas. Nursing faculty members felt ethical dilemmas in many situations, including situations where [the interests of the student and the interests of other students cannot be reconciled] and [the interests of the student and the interests of the patient are at odds]. An e-learning was created to seek ethical solutions regarding the identified situations. The e-learning was made public and operated mainly by young nursing faculty members, helping to improve their ethical sensitivity.

研究分野：看護教育

キーワード：看護倫理 看護教育

1. 研究開始当初の背景

医療を取り巻く環境は、患者の高齢化や医療技術の高度化・複雑化などに伴い日々大きく変化しており、専門職としての看護師に求められる役割も変化している。現代の看護職には、知識・技術の研鑽はもちろんのこと、国際化や家庭環境の変化などに伴って発生する多様な倫理観への理解と対応も求められている。倫理的問題を見逃すことなく向き合い、真摯に対応することは、人権の尊重や患者の利益を守るといった看護職の基本的態度であり、ヒューマンケアの根幹を成すものである。従って、倫理的感受性を高めるための教育は、看護教育のどの段階においても重要なものであると言える。しかしながら、看護基礎教育課程における倫理教育は、十分なものとは言えない現状がある。1967年のカリキュラム改正以降、倫理教育は独立した教科目としては姿を消し、個々の看護教員の裁量に任されることとなった。これにより、学生は体系づけられた倫理に関する学習を得る機会が減少し、更に、現代の若者の特徴である生活経験の乏しさなどの要因も加わり、臨地実習において倫理的葛藤場面に日々直面しているにも関わらず、認知できていない状況が多いことが報告されていた(太田、2003)。

日本看護系大学協議会は、2008年に「看護学教育における倫理指針」を著し、「教育者自身が教育倫理、看護倫理について知識を深め、教育および医療の場における現実的な倫理的課題に目を向け、適切な判断の下に倫理的行動がとれる素養をもっていることが必要であり、そのための力量を高めていくことを責務とする」と発表している。しかし、看護教員自身も看護基礎教育課程で看護倫理について十分に学びを得ていないこと及び比較的臨床経験が少ないこと等により看護倫理教育力に乏しい現状にあることが考えられた。

これらを踏まえて、「倫理・看護教育」の先行研究では、看護学生や看護師に対する教育についての文献が多くある一方、実習場面での看護教育を担う看護教員に対する教育や倫理観の育成方法などについての研究はほとんど見当たらなかった。実習指導を担うことの多い若手看護教員自身の倫理的感受性の向上や問題対処能力がなければ、学生に倫理的葛藤場面を示すことも、倫理的問題についての考察を促すこともできていない。従って、看護教員の倫理に関する教育力を向上することは喫緊の課題である。

2. 研究の目的

本研究は、看護教員が臨地実習における倫理的な問題について教育を実践する際に困難を感じている場面を把握し、若手看護教員の倫理的感受性を向上するための e-learning による学習教材を構築することを目的とした研究である。

具体的には、看護教員に対する調査によって臨地実習でどのような場面で倫理的問題を感じているのかを明らかにする。で明らかとなった看護教員が感じている倫理的問題や場面について、それらにどのような倫理的問題が潜んでいるかについて自己学習が可能な e-learning 教材の作成を行う。作成した e-learning 教材の有用性や倫理的感受性向上のための教育的効果の検証を行うことである。

3. 研究の方法

1) 医学中央雑誌、CINAHL、PubMed にて、国内外の倫理学を含めた看護文献を検索、収集し、検討を行い、看護倫理教育についての動向を探り、知見を深める。

2) 日本看護系大学協議会会員校のうちランダムに抽出した 50 校に在籍する、臨地実習に携わる看護教員のうち同意が得られた看護教員に無記名質問紙調査を実施。質問紙の返信をもって同意を得たものとした。

調査内容は、対象者属性(性別、年代、看護師及び看護教員経験年数)を選択式で、臨地実習で倫理的ジレンマを感じた場面の有無と、ある場合は記述式で回答を得た。

3) 得られたデータを基に、看護教員が臨地実習で感じやすい場面を抽出し、e-learning 教材を作成する。e-learning 教材を公開し、効果を検証する。

4. 研究成果

1) 看護倫理教育に関する動向を調査し、知見を深めた。

2) 看護教員の倫理的感受性向上のための e-learning 作成に先立ち、ランダム抽出し、同意が得られた看護教員 213 名に対し、倫理的ジレンマを感じる場面について質問紙調査を実施した。実態を調査した結果、看護教員は、実習で倫理的ジレンマを感じる場面のうち、【学生の利益と他の学生の利益を両立できない】場面が最も多く、「学力のばらつき、合理的配慮が必要な

学生」「教員が受け持つ人数が多数」「複数病棟の受け持ち」「受け持ち患者による差」などがあつた。【学生の利益と患者の利益が反している】では、「学生の体験が患者の利益にならない」などを感じていた。【患者の利益と医療の利益が反していると感じる】では、「身体抑制・拘束」「患者の意思や権利が軽視されている」「患者への説明不足」などを感じていた。【自己の価値観（看護観）と同僚や上司の価値観（看護観）でジレンマを感じる】では、「教育観・学生観の相違」「領域による価値観の相違」「評価に関する相違」などを感じていることが明らかとなった。以下に日本看護倫理学会で発表したポスターを示す。

P-3-2 看護教員が臨地実習で感じる倫理的ジレンマに関する実態調査
熊本保健科学大学 保健科学部 看護学科 吉野拓未

【はじめに】

医療を取り巻く環境は、患者の高齢化や医療技術の高度化・複雑化などに伴い日々大きく変化しており、専門職としての看護職に求められる役割も変化している。日本看護学会協議会は、2006年に「看護学教育における倫理指針」を示し、「教育者自身が教育倫理、看護倫理について知識を深め、教育および医療の場における現実的な倫理的課題に目を向け、適切な判断の下に倫理的行動がとれる素養をもっていることが必要であり、そのための力を高めていくことを責務とする」と発表している。また、「若手看護教員のためのIPガイドライン」の中でも、「倫理的感性を高めるための自己研鑽に取り組み」ことが推奨され、看護倫理に関する教育力の向上が求められている。しかし、看護教員自身も看護基礎教育課程で看護倫理について十分に学びを得ていないこと及び比較的臨床経験が少ないこと等により看護倫理教育力に乏しい現状にあることが考えられる。「倫理・看護教育」の先行研究においては、看護学生や看護職に対する教育についての文獻が多くある一方、実習現場での看護教育を担う看護教員に対する教育や倫理観の育成方法などについての研究はほとんど見当たらない。そこで、本研究は、看護教員が臨地実習でどのような倫理的ジレンマに遭遇しているのかを明らかにすることを目的とし調査を行った。

【目的】

臨地実習に携わる看護教員が、どのような場面に倫理的ジレンマを感じているのか、実態を明らかにすること

【方法】

対象：日本看護系大学協議会会員校の中からランダムに30校に在籍する看護教員のうち、同意をもって質問紙を返送していただいた者
データ収集方法：日本看護系大学協議会会員校の中からランダムに30校に在籍する看護教員に独自に作成した無記名自己記入式質問紙を配布した。各看護教員の自由意思によって、返送していただき、質問紙の返信をもって同意を得たものとした。
調査内容：対象者属性（性別、年代、看護師及び看護教員経験年数）を選択式で記載する。臨地実習で倫理的ジレンマを感じた場面の有無を記載し、ある場合は記述式で回答を得た。
分析：対象者属性は単純集計にて算出した。自由記述は、記載された文章について趣旨や文脈の意味を損なわないように要約し、内容を分析し、類似性に沿って分類した。
倫理的配慮：研究協力は個人の自由意思とし、研究協力の有無で個人に不利益がないことを文書で説明した。個人情報保護のため質問紙は無記名とした。A大学の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

30校の専任看護教員785名のうち、213名から回答を得た。属性は男性18名・女性194名、職位は教授29名、准教授44名、講師52名、助教73名、助手13名、実習者3名であった。看護師経験年数は平均11.0(±6.9)年、看護教員経験年数は、平均10.1(±7.2)年であった。主に携わる臨地実習は基礎看護実習が最も多く56名、次いで成人看護(慢性期)38名であった。複数の実習に携わっている教員は65名であった。以下に、自由記述を分類した表を示す。

学生の利益と他の学生の利益を両立できない	学力のばらつき、合理的配慮が必要な学生 教員が受け持つ人数が多数 複数病棟の受け持ち 受け持ち患者(疾患)による差
学生の利益と患者の利益が反している	学生の看護体験が患者の利益にならない 技術・思考が未熟な学生 ケア提供のための身体的負担・時間的拘束
患者の利益と医療の利益が反している	身体抑制・拘束 患者の意思や権利が軽視されている 患者、家族への説明不足
自己の価値観(看護観)と同僚や上司の価値観(看護観)でジレンマを感じる	教育観・学生観の相違 実習領域による価値観の相違 評価に関する相違

【考察】

実習で感じるジレンマの中で、学生に関係するものは、マンパワーの問題や実習の配置など教員個人で解決することが難しいと考えられる場面が多かった。また、患者を受け持つという看護実習の特性のためにジレンマを感じるという場面も散見された。回答をいただいた看護教員は倫理的感性を高くもっていると考えられる。そういった教員が、実習中に感じていたことをメンターに相談する場や全体で共有できる場、それを組織的に解決できる場が必要ではないかと考える。各大学では研修の取り組みもされているが、研修会だけでなく、現場の教員の声を聞き、考えていくことを共有できるような取り組みが必要である。価値観の相違に関しては、単なる報告・連絡・相談ではなく、普段から密にコミュニケーションをとり、実習での学生の到達目標、評価内容・方法など、責任者の看護観、教育観を理解していく必要がある。また、今回の回収率をみると、ジレンマを感じることもなく教育に忙殺されている教員も多いと推察される。日本看護系大学協議会には教育者自身が教育倫理、看護倫理について知識を深め、教育および医療の場における現実的な倫理的課題に目を向け、適切な判断の下に倫理的行動がとれる素養をもっていることが必要であり、そのための力を高めていくことを責務とする」としており、まずは、倫理的感性を高め、そこにある問題に気づくことが重要であると考える。

氏名：吉野拓未 所属：熊本保健科学大学 保健科学部看護学科
日本看護倫理学会第16回年次大会 COI開示 当演題発表に関連し、開示すべきCOI開示にある企業・組織および団体等はありません。

3)上記で明らかとなった倫理的ジレンマを感じる場面に関して、倫理的な解決方法を模索する e-learning を作成した。その後、若手看護教員にその URL を提供し、ディスカッションを行う場を提供したことで、看護倫理場面を考えるきっかけとなった。

以下に作成した e-learning の一部を示す。

e-learning において、倫理的ジレンマを感じやすい場面の提示



e-learning において、1 場面の詳細の提示

場面1：患者の利益と学生の利益が相反する場合

学生Aは、受け持ち患者Bさん（60歳代、専業主婦）を受け持っている。

患者Bさんは、実習にも大変協力的で、コミュニケーションをとったり、学生Aが何度か失敗したバイタルサインの測定も笑顔で「焦らず大丈夫よ」と声かけてくれ、良好に信頼関係を結んでいた。



若手看護教員を中心に e-learning を公開、運用し、倫理的感受性向上の一助となった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 吉野拓未
2. 発表標題 看護教員が臨地実習で感じる倫理的ジレンマに関する実態調査
3. 学会等名 日本看護倫理学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------